

米中の個人消費動向を確認～米・中小売上高

2020年5月11日(月)

新型コロナウイルスの感染拡大が継続する中、日本の緊急事態宣言が5月末まで延長されるなど、世界的なロックダウンが続いています。もっとも、中国をはじめ、いくつかの国ではロックダウン緩和の動きが広がり、経済再開への期待が広がってきています。

そうした中で来週15日に米国と中国の個人消費動向を示す小売上高(ともに4月)が発表されます。新型コロナウイルスの感染元となった武漢市があり、被害拡大が世界で最も早かったものの、1月23日から始まった武漢市の閉鎖が先月8日に解除されるなど、再開の動きが急速に広がっている中国。現時点で感染被害が最も深刻で、感染者数、死者数ともに中国を大きく上回り、ロックダウンへの動きがみられるものの実現にはまだ時間がかかる米国。対照的な2つの国の直近の個人消費動向がどうなっているのか。今後の世界経済の回復への見通しにも関係するだけに、注目を集めるところとなっています。

まずは15日11時に発表される中国の小売上高から。

昨年12月時点での中国の小売上高は前年比+8.0%、2019年を通しての小売上高も+8.0%と、かなり好調な状況でした。1月後半から広がった新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、2月時点での年初来小売上高(中国は春節が1月にある年・2月にある年、1・2月にまたがる年とあり、それによって大きく売上げが変化するため、1、2月は単月での数字を出しません)は、-20.5%まで急激に悪化しました。3月に入ると制限の緩和などが見られたこともあり、少し状況が改善していると期待されましたが、3月単月で前年比-15.8%、年初来では-19.0%と、かなり小幅な改善にとどまりました。ただ、4月8日に武漢市のロックダウンが解除(他地区ではもっと早く制限が緩和されています)されるなど、経済の再開が本格化する中で、4月は大きな改善が見込まれています。事前予想は4月単月で前年比-5.8%、年初来で-13.0%となっています。

さすがに成長軌道に戻るまではいきませんが、一時に比べると状況がよくなってきたという印象です。ただ、基本的には大きなプラス成長を続けてきた近年の中国経済だけに、まだまだ痛手が大きいという印象に。予想を超える改善を見せると、対中輸出が大きいことに加え、自国での制限緩和が進んでいる豪州やNZへの期待感につながり、豪ドル、NZドルの買いが強まる可能性があります。

なお、小売上高と同時に鉱工業生産も発表されます。こちらは工場の再開などが進んでいることもあり、3月時点で-1.1%とかなりの改善(2月の年初来は-13.5%)を示しました。今回は+1.5%とプラス圏を回復する見込みです。昨年12月時点での同指標は前年比+6.9%ですから、こちらも本調子まではまだ遠いですが、プラス圏回復は一つの節目として意識されそうです。

続いて、15日21時半発表の米小売上高です。前回3月分の同指標は、前月比-8.7%と1992年の同統計開始以来最悪の下げ幅を記録しました。店舗の閉鎖などがまともに響いた格好で、内訳をみると、飲食サービスが-26.5%、衣料・装飾品が-50.5%と大きな落ち込みとなりました。移動制限に加え、需要減でガソリン価格自体が下がったこともありガソリンスタンド売上げが-17.2%、自動車及び同部品が-25.6%とこちらも大きく落ち込んでいます。もっとも自宅での待機を余儀なくされたこともあり、食料品店は+25.6%と大きく伸び、アマゾンなどのオンラインストアによる無店舗小売も+3.1%と堅調でした。月ごとの変動が激しい自動車を除いたコア-4.5%と落ち込んでいますが、GDPの個人消費との相関が高い飲食・自動車・ガソリンスタンド・建材を除いたコアベース売上高は+1.7%と予想外に増加しています。なお、その後改定が入り全体の数字は-8.4%に、自動車を除くコアは4.2%となっています。

こうした状況を受けて4月の米小売上高ですが、予想は前月比-11.0%、同自動車を除くコアが-8.0%とさらなる悪化を示しています。前月比ですから、3月のかなり厳しい状況と比べて、それでもここまでの落ち込みということで、どれだけ厳しい状況なのかが見て取れます。ここにきてガソリン需要が少し回復するなど、需要に少し回復のめどが見えますが、ロックダウンの解除が進まないことには本格的な需要の回復は難しいところ。深刻な雇用状況なども合わせ、厳しい状況が続くそうです。

ある程度は想定内も、予想を超えて売上げが落ち込んでいるようだ、ドル売りが広がる可能性があります。ドル円が105円割れを意識するきっかけとなる可能性も。